

左甚五郎の鼠

むかし、飛驒の内匠といふ人は、皆様もごぞんじの左甚五郎といつて、名高い彫刻師で、この人の細工した鼠とか猫とか人の様なものでも、皆丸で本物と見違える位上手であつたといふこと。

これは左甚五郎よりは、ずっと後のお話ですが、ある時、大久保彦左衛門といふ方が、仙臺の殿様のお屋敷に伺ひました、お坐敷に通つて、殿様といろくのお話などして居ます中に、今申した左甚五郎の話が出て、どうも、左甚五郎と申す人は彫刻にかけては、中々甘いものだ、どうだ、彦左衛門、これを見い、と仰つて、殿様は、左甚五郎の造つた御秘藏の鼠を出して見せました、すると、お側に居た一匹の猫が、夫を見ていきな

り飛びかゝつてきて、其鼠を啣へたなり走つて行きました。そこで、お側に居た大勢のお客様や、御家來などは

さすがは左甚五郎の作だけあつて、猫の目にまで眞物に見えるのだな、これは珍らしい品だ

といつて、皆で感心して居りますと、彦左衛門は一向感心もしない様子。

『はわ、私にはあの鼠は一向珍らしいとは思はれません、私の宅にはあの位の鼠は何匹でもありませす』

といつて、濟したものです。殿様は

『夫じや、明日お前の所へ行くから、己に其鼠を見せてくれ』

『お易い御用、どうかおいでを』
といふ事で、さて翌日になつて、仙臺の殿様は、

彦左衛門の屋敷に行つて御覽になりますと、彦左衛門は、

『只今御覽に入れます』

といつて慥らえた鼠を五六匹出しますと、側に居た五六匹の猫が夫を見て、吾先きにと争ふて、啣えて行つて仕舞つたので、殿様もこれには、吃驚して、屋敷へお歸りになりましたが、後で、よくく聞いて見ますと、その五六匹の鼠といふのはみな鯉魚節で造つたものでしたとさ。

一休のおはなし

一休といふ坊さんは、今から大方五百年も前の方で、小さい時の名を千菊丸と申しますが、六歳の時、京都の紫野の大徳寺といふお寺に這入つて、其處のお住持のお弟子になつたのであります。性

質がまことに、伶俐でしたから、お經でも習字でも、他のお弟子が十日もかゝつて覚える事は、一日で覚えて仕舞ふ、年長の坊さん達のまだ知らぬ事でも、一休はもうちやんと知つてるといふ位でしたから、和尚様も大層可愛がつて大事に育て、居りました。

所が、ある日の朝、このお寺へ、獸の革袴を穿いた一人のお武士が尋ねて参りました、一休は、夫を見て、大急ぎで、一枚の半紙へ次の様な事を書いて玄關へ張り出しました

此お寺では、獸の革の類は堅く禁制なり、若し革の物入る時は其身に必らずばち當るべし
お武士はこれを見て

『この小僧生意氣な事をする、己が革の袴を穿いて居るもんだから、こんな事を書いて、己を困ら